

高校生における腸管出血性大腸菌感染症の集団発生

¹横浜市健康福祉局 健康安全課、²横浜市衛生研究所○岩田 眞美¹、山田 三紀子²、松本 裕子²

【はじめに】昨年は富山県を中心とした焼き肉チェーン店における食中毒による死亡例が発生し、その年の10月の生食用食肉（ユッケ等）の規格基準・表示基準の制定や、今年7月からの牛レバ刺しの提供禁止につながった。腸管出血性大腸菌（EHEC）感染症の散発例では、原因や暴露日をはっきりと特定できないことが多い。今回、単一暴露の比較的均一な青年集団におけるEHEC感染症の集団発生を経験したので、報告する。【事例】神奈川県下の焼き肉チェーン店で同一日に食事をした高校生の生徒複数が、下痢・腹痛等で欠席していると学校の校長からの連絡で探知し、調査を開始した。参加者34名のうち、有症状者17名中10名、無症状者17名中6名、計16名（47%）から、O157VT1VT2が検出された。感染発症指数は62.5%であった。潜伏期間は、発症者10名の平均が3.9日であった。症状は、腹痛と水様性下痢がほとんどで、血便を認めたのは2名だけであった。菌の排泄期間の平均は、有症状者で抗菌剤投与ありが10日（6～14日）、抗菌剤投与なしが13日（8～28日）、無症状者が13日（10～19日）と、長期にわたる排菌を認めた。有症状者で発症時から抗菌剤の投与を受けていたのは3名、発症時には投与されていなかったが、回復後の培養で菌が陽性のため抗菌剤を投与された者は4名、無症状者については4名が除菌のための抗菌剤投与を受けていた。感染者の家族全員に便検査を実施したが、二次感染は認められなかった。【考察】症状の有無にかかわらず、菌の排泄が遷延している例が見られたことから、注意深い経過観察が必要であり、同様に二次感染予防にも注意することが大切と考える。

急性胆管炎における初期の経験的抗菌薬治療が治療成績に及ぼす影響の検討

¹亀田総合病院 総合診療・感染症科、²亀田総合病院 臨床検査部○朽谷 健太郎¹、鈴木 大介¹、三河 貴裕¹、上袁 義典¹、村中 清春¹、馳 亮太¹、細川 直登^{1,2}、戸口 明宏²、古村 絵理²、大塚 喜人²

【目的】近年ESBL, AmpCなどの耐性菌が増加しており、初期治療で経験的に広域の抗菌薬を投与すべきかどうか問題となっている。急性胆管炎の治療においては、ドレナージが重要であり、抗菌薬治療は補助的であるといわれているが、その初期治療において抗菌薬が治療効果に及ぼす影響を検討する。【方法】2011年に当院で経験した血液培養陽性の急性胆管炎を後ろ向きに解析した。治療開始時に投与した抗菌薬に対して、血液培養にて起菌菌として同定された菌が感受性であった群と、耐性であった群にわけ、死亡率、再発率、解熱までに日数を比較した。【結果】症例は99例で、初期の抗菌薬治療に対して起菌菌が感受性であったのが79例、耐性であったのが20例であった。それぞれ63例(79.4%)、16例(80%)は発症1日以内に内視鏡的ドレナージが施行されていた。それぞれ原疾患による死亡率は1.3%、0%($p=0.93$)、原疾患以外も含めた院内死亡率は8.9%、5%($p=0.72$)、胆管炎再発率は10.1%、10%($p=0.99$)と有意な差は見られなかった。解熱までに要した日数もmedian 1 day(range 0-5)、1 day(0-3) ($p=0.65$)と有意差は見られなかった。【考察】急性胆管炎の初期抗菌薬治療において、起菌菌に対して耐性であっても感受性判明後に有効な抗菌薬に変更すれば、治療成績に差は見られなかった。急性胆管炎においては、耐性菌を考慮してむやみに初期治療に広域抗菌薬を用いる必要性は乏しいことが示唆された。